

# 犬フィラリアの大腿動脈栓塞症

岐阜大学農学部家畜病理学教室 第13回獣医病理研修会標本 No.186



1



2

動物は、犬、シェットランドシープドッグ、♂、8才の安楽死直後の剖検例である。

1972年10月9日突然喀血，ラッセル卍，体温39.8℃で、犬フィラリア症による喀血と診断し処置した。同年10月12日には喀血は止み，食慾も回復して少康を保った。しかし，同年10月16日に右後肢麻痺し，無痛覚，屈腱反射一，膝蓋反射も一，足蹠を裏にむけて歩き，大腿動脈において無脈であった。同年10月30日には，右後肢は足関節以下の皮膚，筋組織は壊死し，被毛も脱落し，ミイラ状となる(図1)。同年11月1日には，左後肢も同様変化におちいった。なお，臨床検査の細部は省略する。

肉眼的所見：右外腸骨動脈，右大腿動脈内にフィラリア成虫の栓塞がみられた。左外腸骨動脈，左大腿動脈内には，肉眼的には，血栓形成のみがあった。同時に，両後肢とも足関節以下の皮膚，筋組織の壊死が存在した。また，右心房室，肺動脈内にフィラリア成虫を中等度認め，肺動脈内膜炎を伴っていた。肺では，フィラリア栓塞を伴う高度の気管支肺炎，肝の中等度の腫大，硬変が

みられた。

組織学的所見：肉眼所見に一致して，鏡下においてもフィラリアの動脈栓塞がみられた。とくに右大腿動脈(図2，H&E，×12)に高度であった。問題点の第1として，本例は丹念に検索したが，卵円孔，動脈管開存などの心奇形は認められなかった。わが国における同様症例は最近，早崎らによれば「これまでに12例あり，そのすべては卵円孔開存によるものであり，年齢は2才から6才の間にある」と言う。しかし，本例は，剖検時の検索不足を認めた上でも，8才になるまで何ら変状なく過したと言う点で，心奇形の存在を認めることに躊躇するのであって，心奇形がない場合，この病理発生をどう考えればよいか。第2の問題点は，図2の右大腿動脈壁の外膜位に壊死，線維形成が比較的強いのに比べ，フィラリアに接する内皮や内膜自己には病変が極めて軽いのはどういう機轉によるものであろうかと言うことである。ともあれ，提出標本は，病理組織的に右大腿動脈におけるフィラリア栓塞と診断された。